

くらしと協同の本

松岡 公明 著

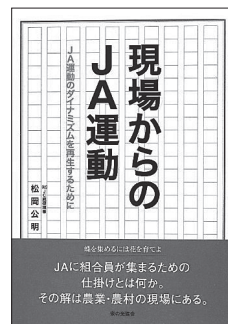
『現場からの JA 運動』

【BookData】

発行 家の光協会 2012 年 9 月 96 ページ

値段 700 円 + 税

ISBN : 978-4-259-52174-5



評者：根岸 久子（JC 総研客員研究員）

1. 国際協同組合年に向けて

国連は、2012 年を「国際協同組合年」と定めた。協同組合がより良い経済・社会の建設に大きく貢献できると評価し、その発展を期するよう各国政府・国民に訴えることが目的で、そのスローガンは「協同組合がよりよい社会を築きます」である。わが国の協同組合の姿を思い浮かべ、これに違和感を感じる人も少なくないのではないかな。

JA について言えば、30 年ほど前に当時の ICA 会長レイドロー氏は、世界の協同組合が直面している危機を指摘した際に、総合的な事業展開により組合員や地域住民の暮らしに貢献しているとして日本の JA を高く評価した。しかし、大型合併・経営効率化等もあって、当時に比べるとそれらの事業活動はかなり後退しているし、組合員と JA との関係も希薄化している。それについて著者は、JA のもつ経営資源（協同組合性）を使い切れていないからだという。

本書は、そうした思いに突き動かされた著者が、「国際協同組合年」を単なるイベントにとどめず、内実を伴ったものにするため、協同組合原則に照らしつつ今後の JA の組織運営のあり方をまとめたものである。「現場からの JA 運動」というタイトルは、その手本は現場にあ

り、試行錯誤を重ねている現場の実践にこそ学ぶべきものがあると考えからであろう。

9 章で構成されているが、第 1 章「国際協同組合年にあたって」と第 2 章「神話の崩壊とパラダイムの転換」は、本論への導入部分で、「逃げる組合員、追う JA」という言葉に示される組織事業運営の問い直しと、協同組合としての JA がめざすべき方向を総論的に論じている。

2. 現場からの JA 運動の課題

しかし、協同組合として「参加」や「民主的運営」を謳ってきたものの、「国策として育成・組織化された JA」は、農政の下請けの機能を担ってきたため、多くは組織も事業運営も組合員の参加は形式的なものにとどまってきた。それゆえ組合員も職員も協同組合人としての訓練機会は乏しかったと言える。そうした現実のなかで組織事業運営のパラダイムの転換は容易ではない。協同組合としての内実をどう構築していけばいいのか。第 3 章以降は、研究事例や実践事例を参考に具体的に述べている。

まずは現状分析で、第 3 章「JA 運動の点検」では、「組織・事業基盤」、「組織運営」、「事業経営」の 3 つの視点から現状を点検したうえで、組織事業運営における伝統的システムを見直し、参

加型運営へと向かうことが重要だとしている。このことを組合員参加で自律型事業運営を実践してきた十勝地区のJAが合併ではなく機能統合を選択し、成果を上げている事例を紹介しつつ解き明かしている。

第4章から第6章は参加型の組織事業運営に接近していくための具体策で、「JA ビジョンづくり」、「現場主義で考える」「参加・民主的運営」の3点を、それぞれ実践事例を通して抽出している。たとえば、「葉っぱビジネス」で有名な上勝町や支店を拠点とした活動を展開しているJA 福岡市では、ビジョンの明確化が問題意識を共有化し、行動する動機づけになり、参画意識を高めたとしている。また、組合員の意思表明＝参加システムの一環として「クレーム処理」を位置づけること、大型合併下では地域性と機能性を切り口に「小さな協同」を組織化し、可能な限り直接民主主義に近い運営方法を追求することが必要だとしている。ここに通底するのは著者の、「参加・民主主義の意義については教科書的に強調することより活動を通して経験的に認識できるような動機づけが必要」との強い思いであり、その意味で本章は現場からのJA運動実践の手引きとも言えよう。

とはいえ、今や「現場からのJA運動」を展開していくのは至難のことであろう。そこで、第7章（「協同組合のイノベーション」）では、参加型組織運営により地域農業を再生したJA 甘楽富岡と、それによる組合員・職員の意識変化が組織運営や事業展開に好循環をもたらしたコープみやざきの実践を通して、参加型への転換＝イノベーションの重要性を提起している。ちなみにコープみやざきでの一番大きな変化は、生協の役員において「弁が立ち、押しが強い、説得の得意な人」から「人の話をよく聞き、まとめる能力のある人」が選出されるようになってきたことだという。これからの協同組合のリーダー像と言えようが、翻ってJAはどうだろうか。

第8章（「協同組合と地域づくり」）と9章（「国民的理解と共感の醸成」）では、第26回JA全国大会で決議のされたこれらのことを具体化するうえで、協同組合らしさの追求が課題となることを解き明かしている。

3. 問われている「現場からのJA運動」

本書を貫くのは協同組合らしいJAをどう構築していくかであり、組織事業運営のあり方を軸に、それへの接近を試みたのである。こうした意見は、これまで「理念では飯は食えない」と退けられてきたが、本書は実践事例に基づきこれを論破している。しかし、これを実証しているのは本書の事例にとどまらない。例えば、国際協同組合年実行委員会から地域貢献度で表彰されたJA あづみの助け合い組織の大いなる発展は、まさに協同組合らしい組織事業運営を愚直に追求してきた結果である。

また、本書で提起していることは、これまで研究者や現場の人々が指摘し、改革を迫ってきたものが少なくないが、いずも対症療法で済まされてきた。その意味で、TPP問題をはじめ農業・JAが危機的状況のなかで対症療法では済まされなくなった今、根本的治療を提起した本書は時宜を得たものと言えよう。しかし、著者も本書を「JA職員へのメッセージ」としてまとめた」と記しているように、現場での実践には職員の役割が欠かせない。その意味で、現場からのJA運動を実践できる職場（組織風土）づくりの方途にも言及してほしかった。そうした風土がJAらしい職員や組合員を育むからである。

かつて「国際婦人年」が制定された時、自らの現実との違いを「遠くで鳴る鐘の音」と表現した農業女性がいたが、これを契機とした女性たちの運動は女性の経済的・社会的地位を押し上げてきた。協同組合陣営も国際協同組合年をその内実を豊かにする契機とするか否かが問われているのではなかろうか。